

キリスト教には環境問題を引き起こした重大な嫌疑がかけられている。聖書の中に、はなはだ問題がある箇所があるからである。長い全文を紹介してみたい。

「神は彼らを祝福して言われた。『生めよ、ふえよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ』神はまた言われた、『私は全地のおもてにある種を持つすべての草と、種のある実を結ぶすべての木とをあなたに与える。これがあなたがたの食物になるであろう』」

天地創造が書かれている、かの『創世記』第一章二十八編の一節である。この部分が、一九六八年、環境思想上、大論争を引き起こすきっかけとなった。告発者は米カリフォルニア大学の教授、中世農業技術史が専門で、ルネサンス研究者としても名高いリン・ホワイト・Jrである。

ホワイトは『機械と神』という著作の中で、今日の環境問題の起源を歴史的・思想的に説き起こし、大本にあるのがユダヤ・キリスト教だと述べた。といってもキリスト教そのものを糾弾したのではない。ホワイトは今日の環境問題は科学や技術の無制限な研究・開発によってもたらされたと指摘。それでは何が根拠となって無制限な科学と技術の発達をもたらされたのかと問い、その起源が現在をはるかにさかのぼることを解き明かしたのである。

近代科学は十一世紀にギリシャ的な思考とキリスト教の教義とがうまく融合したことで発達し始めた。だが、科学技術が発達するにしても、なぜ人間は特別な存在であり、自然を破壊してもいいのだろうか。

人間は神が泥をこねて創り上げた存在である。しかし人間は単なる自然の一部でもない。神に似せて作られたからである。人間はすべての動物に名前をつけ、動物を支配した。神は人間の利益と支配のために動植物を、否、あらゆる物的な創造物を準備したのである。それを象徴するのが先に掲げた『創世記』の言葉で、これを大義名分に人間の自然支配は成立した。人間が自然を支配することは神の意志に沿うことなのである。

自然は人間と分離され、物事はすべて人間への有益性から判断されることになった。万物は人間から見ても役立つかどうかで存在意義が決定するという人間中心主義の自然観。ここから、自然を酷使し資源を浪費させる科学技術の発達が始まった。科学技術の無限の発達は、人間に役立つ限りは善であり、自然を破壊することも容認される。

キリスト教を批判したのだから、「ホワイトは反キリスト教なのか?」「何教の信者なのか?」と疑問に思われる方もいるかもしれないが、実は敬虔なキリスト教徒であった。だからこそ、かえってホワイトの指摘には、単なる勸善懲惡の構図ではない奥深さが潜んでいる。

ホワイトの著書への反響はすさまじいものがあつた。宗教的な態度が自然環境に影響をもたらすというホワイトの考え方に、学者と神学者はおおむね賛同したが、キリスト教徒と宗教家は猛反発した。机に山積みされた抗議の手紙を眺めながら、ホワイトは「私は科学者を批判したはずなのに」と苦笑したという。

エコロジストの反応は様々であつた。キリスト教に問題があつたのか否か、問題があつたとしたらどこ部分なのか、逆に評価するとして誰なのかが、それぞれに異なっているのだ。どのエコロジストも、自分の立脚している思想的土台から弁護や批判を展開している。

ネオ・マルサス主義者にとって問題となるのは、「生めよ、増やせよ」の部分となる。これこそが人口爆発につながつたということになる。資源管理を試みようとする者にとっては、天国には無尽蔵の資源があるという前提で動いていることに問題の根幹を見いだした。動物解放派にすれば、動物を食べることを肯定しているという指摘があがってくる。ディーブ・エコロジイのように、思想的に同じ立場でありながら、識者ごとに対立する意見が出てくるという現象も見られた。論争は混乱を極めた。件の『創世記』の節をめぐっても、「あれは地上の支配権ではなく、管理権を与えたものだ」という意見が出されている。

ホワイトは、「臆病であるよりも間違っている方がまし」という、昨今の学者にとって耳の痛い勇敢な発言をし、この命題に取り組んだ。次第にその主張は、当初のトーンを下げて、論点を宗教全般に問題があるという形に改めている。

多くのエコロジストにとって重要であつたのは、ホワイトの意見が妥当か否かということよりも、環境問題の背後には思想構造が横たわつているという点が明らかになつたことである。そしてこれ以前、環境問題に取り組んでいた人たちは大同団結していたが、以後、様々な論争が開始された。しかし、ホワイトが提起したキリスト教の問題の決着はいまだに完全な形ではついていない。

おそらく、キリスト教の教義そのものというよりも、後世の誤つた解釈にこそ問題があつたのではないかというのが妥当な線ではないか。というのも、『新約聖書』の中には異教徒であるか否かよりも、愛と慈悲心を持っているかどうかの方が大切だというキリスト自身の説話も載っているのに、その後のキリスト教は排他性を際立たせた。これと同じことが自然に対してもあてはまるように思えるからである。

キリスト教は自然保護にも自然破壊にも、どちらにも解釈可能な教義を持っているのである。しかしヨーロッパで必要とされたのは、自然保護ではなく自然克服の解釈だったのである。過酷な砂漠で生まれた一神教は、寒冷なヨーロッパの風土に適応し、拡大しながら各地のアニミズムを破壊していった。どう弁護しようとしても、自然環境破壊と各地の文化破壊の「事実」だけは否定できないだろう。

イタリアのアッシジに世界各地の宗教的指導者を呼び、「各々のやり方で、各々の神に、各々の言葉で、平和を祈りましょう」と語つた故ヨハネ・パウロ二世の叡智を、過去のキリスト教指導者が持ち合わせていたならば、避けられた悲劇も多かつたに違いない。

開智学園総合部 八年国語

キリスト教にかけられた嫌疑

日経エコージャー